
faked wedding

はち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

f a k e d w e d d i n g

【Nコード】

N 0 1 8 1 A

【作者名】

はち

【あらすじ】

依頼で兵庫県に出かけたコナン・蘭・小五郎は、偶然そこを訪れた平次・和葉と出会います。依頼があった事件はなんと「ご祝儀泥棒」。そこで、犯人を逮捕するべく現地の警察と協力して考えた手段は、オトリ作戦でした。そのため、急遽偽の結婚式を挙げることに。結婚するのはあの二人？果たして彼らは無事に犯人を捕まえることができるのでしょうか・・・??

プロローグ（前書き）

これは、SDB10+にあった「あったらいいな」という事件案をもとに作者が考えた小説です。

（内容は完全に作者の書いたものです。）

プロローグ

<兵庫県明石市ボンクールホテル>

「・・・どう？準備は良い？」

「うん・・・」

ぎこちなく頷いた和葉の肩に、そっと優しく手を置いて
蘭はにこりと笑った。

「大丈夫！お父さんだって服部くんだっているんだし！
それにそのカッコ、良く似合ってるよ。」

「・・・あ、ありがとうオ、蘭ちゃん・・・」

「ホントは・・・」

「え？何？」

「あ、ううん。何でもないの。」

何か咄嗟に出かかった言葉を飲み込んで、蘭が首を振った。

そんな蘭を和葉はいぶかしげに見ていたが、

その時ちやうど、背後でドアが開く音がした。

「和葉ア、早よせ・・・」

（へ、平次！？）

入ってきた幼馴染みと鏡越しにフツと目が合う。

けれど、その視線は、お互い照れたようにすぐに逸らされた。

「支度終わったら早よ来いや・・・」

「う、うん・・・」

「まー、お二人さん照れちゃって!」

「ら、蘭ちゃんっ!」

「わぁ、和葉姉ちゃんすっごーいっ!」

「コナンくんまで!」

（お、おい! 工藤っ!）

ヒョイっ

「わ・・・」

平次は後からちよこちよこと入ってきて大胆にも感想を述べた
コナンをつまみあげると、「じゃ、お先に」と急いで部屋から出て
行った。

「服部くんたら、照れちゃって・・・」

「そやね・・・あんな平次、珍しい・・・」

「じゃあ、わたしたちもいこっか。」

「うん・・・」

蘭が見守る中、和葉はゆっくりとその部屋を後にした。

耳まで真っ赤に染めた和葉とは対照的に、その後ろ姿を見つめる蘭
の瞳には

少しだけ哀しい色が揺れているようだった。

「ホントはわたしも着たかったな・・・」

そうつぶやいて、蘭は和葉の後を追った。

プロローグ（後書き）

＋＋作者より＋＋

今回が初投稿です。

ずっと書きたかったお話なので気合入れて書いてます！

ふだん自分のサイトでは、平和のラブ？小説しか書いていないのでちゃんとした推理（＋ラブv）小説を書けるように頑張ります！

感想いただけると泣いて喜びますのでよろしくお願いします。

運命の出会い??

<3時間前>

「いやー、ホンマに驚いたわ。

まさかこんなところでお前らに会うとはなァ。」

「ホント。わたしたちも服部くんや和葉ちゃんに会えるなんて思ってもみなかったよ。」

ここは兵庫県明石市のあるレストラン。

順番待ちをしていた小五郎、蘭、コナンというお決まりのメンバーに後から店に入ってきた平次、和葉がばったり出会ったのだった。

「ホンマ、これを運命というんやで、工藤。」

「ハァ？」

「何で工藤くんなん？」

「コナンくんも返事しないの！」

「う、うん・・・アハハハ・・・」

(コイツ・・・)

睨んで見上げたコナンに、平次はウィンクを返した。

「それにしても、何で蘭ちゃんたちがこんなところにおるん？」
「そうそう、それなんだけどね・・・実は、依頼が来て・・・」
そう言いながら、蘭はごそごそとかばんを探ると
一枚の手紙を取り出して皆に見せた。

「お！どーも無いなあと思ってたら、お前が持ってたのかよ！」
「だってお父さん読んだら読みっぱなしなんだもん。」
わたしが管理しておきました！」

「・・・ったく、素人が触るんじゃない。」
「ひどーい。」

（ハハハ・・・おっちゃんも推理は充分素人だけだな。）

毛利小五郎様

突然お手紙を送ってしまい、誠に申し訳ありません。
でも、どうしても毛利さんに取り返して頂きたいものがあつて
お手紙を書かせていただきました。

実は、私、先日兵庫県のとあるホテルで結婚式を挙げました。
そこで、式の間私に私の大事なものが盗まれてしまったんです。
それが何かは、直にお会いした時に説明したいと思います。
こんな身勝手なお願いですが、いらして頂けませんでしょうか。
こちらへの旅費はすべて私が負担しますのです。

一応電話番号を書いておきます。
どうか、よろしくお願いします。

078-XXXX-XXXX 赤山 紀子

「ほー・・・なるほどな。」

平次は一通り手紙を読み終えると、蘭に手渡した。

「それで、この手紙と一緒に2人分の新幹線の切符と待ち合わせ場所の地図が入ってたのよ。」

（っ！この大阪のガキっ！オレに渡せてたってんのに！）

そう地団太を踏む小五郎を和葉が横目で訝しげに見た。

「とりあえず、飯食い終わったらそこ行ってみよか？」

「大阪の小僧！お前は呼ばれとらんだろっ！」

「いいじゃない、別に。その方が早く解けそうだし。ねえ、コナンくん？」

「ボ・・ボクはどっちでもいいよ・・」

曖昧な返事を返したコナンの頭をがしと撫でて、平次は満面の笑みでそれに応えた。

「よーし！そうと決まれば早速飯や！」

一人、元気にウェイターについていく平次。

もはや彼は誰にも止められない。

例え、彼の幼馴染みであっても・・・

「和葉ねーちゃん、平次にーちゃん行っちゃったよ？」

「うん・・・」

「服部くん、いきいきしてたね。」

「もオ、事件で聞いたらいっつもアレなんやから・・・／／／」

（・・・ハア。）

・
どうして一番年少の彼が溜息をつかなければならないのだろうか・・

運命の出会い?? (後書き)

十十作者より十十

ついに二話目です。

いや、このまえのがプロローグだからこれは一話目??

とりあえず連載できるように頑張ります!!

感想、よろしくお願いします。。。

依頼人

「まったく、こんなんじゃ依頼人の話もろくに聞けねえじゃねえか。」
依頼人―赤山紀子が待ち合わせに指定したのは
市内のこじんまりとした喫茶店だった。

『わかりやすいように窓際の端の席にいらしてください』
そう書き添えてあったために、小五郎ら一同はその「窓際の端の席」
とやらにいるのだが

もともとがそれほど大きな店ではない上
指定された席は小五郎と依頼人が座ることを前提とされているため
2人、多くても3人しか座れないぐらいのスペースしかなかった。
それでも無理やりに座ろうとする平次とコナンは
カウンターから椅子を持ち出して、テーブルに吸い付くように座っ
ていた。

「ねえ、わたしたちは別の席で聞いてようよ、コナンくん。」

「えー、やだやだ！ボクここで聞いている！！」

「平次イ、依頼されたんはおっちゃんなんやで？」

アタシらなんかここで偶然出会っただけやんか。

おっちゃんの邪魔せんと、あっここで聞こ？」

「何ゆうてんねん。ここやないと詳しく聞かれへんやんけ。」

「そうそう、質問もできないじゃない？だからボクおじさんのお膝
に・・・」

「やめろ、そんなの無理に決まってるじゃねーか。」

てこでもそこから動くまいとする二人の若き名探偵を前に
二人の幼馴染みは顔を見合わせて溜息をついた。

「あ・・・」

「え??」

そのとき店に入ってきた女性を見て、あっと声を出した小五郎につられ

その場の全員が同じように喫茶店の入り口を振り向いた。

「あれが依頼人さんなん?」

「ずいぶん白いねーちゃんやなア。」

「ほらコナンくん、あの人が座れないでしょ。さ、行こ!」

「やだやだー! ボクここにいたいー!!」

蘭は駄々をこねるコナンを軽く抱き上げると

さっさと小五郎の背後の席にまわった。

「平次もやっ!!」

「おあっ・・・ちよっ・・・」

和葉も幼馴染みの黒い右腕を引っ張ると、

ふくれっつらをしているコナンの隣に座らせた。

和葉が蘭の隣に落ち着いたところで

先ほど店に入ってきた若い女性が4人の横を通り過ぎて

あたりをきよろきよろと見渡しながら小五郎の正面に座った。

「あ、あの・・・私が依頼した赤山紀子です。」

わざわざ来てくださって本当にありがとうございます。」

「いーんですよ! 美女の頼みなら、たとえ火の中水の中っていいま
すでしょ?」

「は・・・はあ。」

「それで、その盗まれたものってなんなんですか?」

「あ、はい。それは・・・」

紀子は待ち構えていたように、膝にのせた鞆から
白い封筒のようなものを取り出した。

「これは・・・ご祝儀袋・・・ですか?」

「そうなんです。」

小五郎が訝しげに訊ねると、紀子は目を見開いて頷いた。

「実は、私達のご祝儀が盗まれてしまったんです。」

「なんだと？」

「なんやて？」

後ろに聞き耳を立てていたコナンと平次が同時に眉をひそめた。

「おい、ねーちゃん。そらどういうこっちゃ。」

「本当に盗まれたの?? 詳しく聞かせて！」

突然後ろから声が聞こえて、紀子は驚いたように振り向いたが二人にししっと手を払った小五郎に促されて恐る恐る話を話した。

「・・・あれは、式が終わって二次会も終わった後、ホテルに戻って夫と二人で後片付けの手伝いをしていたときでした。」

ホテルのボーイさんのひとりが突然私達のところに走ってきて

『すみませんっ!』ってひたすら謝るんです。」

「ほう。それで？」

「私も最初は何が何だかわからなかったんです。」

ボーイさんも相当慌てていたみたいで、全く要領を得なくて。

でもそのボーイさんに詳しく聞いてみると、私達が帰って来るまでは

確かにあったはずのご祝儀をいれた袋が盗まれていた、と言うんです。」

「ホテル側の不備でなくなったのではなくて？」

「はい。私達も初めはそう思いました。」

でも、ボーイさんが言うには、覆面をした犯人が袋を盗むのを何人かが目撃した、と。」

「なるほど。」

「そらおかしい事件やなア。」

「ご祝儀袋どろぼうなんて珍しいねっ。」

「コナンくん! お父さんの邪魔しないの!」

「平次も恥ずかしイからおとなしゅうしてて！」

「あ、あの失礼ですが、後ろの方たちは息子さん……ですか？」

「ハ？ あーいやいや、ぜんっぜん違いますよ。」

ただの推理好きな高校生と居候などなどですて……」

小五郎の言葉にカチンときたのか、探偵二人はぐるっと後ろに体を向けて

見当違いな発言をした依頼人に訂正をいれようとした。

「ボク江戸川コナンっていうんだ。よろしくね。」

「え、ええ……」

「オレは服部平次。関西やったらちよつとは有名な探偵や。」

「へえ。探偵さんなんですかあ。」

「あ、ボ、ボクも……」

「コナンくんっ！」

蘭は喫茶店のシートに膝立ちをしていたコナンをひょいと抱いて自分の横に座り直させた。

「わたしは、毛利小五郎の娘の蘭です。」

で、この子はうちで預かってる知り合いの親戚の子なんです。」

「アタシはそこの平次の幼馴染みで、お守り役の遠山和葉でいいます。」

どーも、うちの平次が早速ご迷惑おかけしたみたいで……」

「オマエはオレの母親かつ！」

「アタシはアンタのおかーさんにお守り頼まれてんねんからっ！」

「まあまあ二人共……」

「お、面白い方たちですねえ……」

「すいません、うるさいガキどもが……」

ポリポリと頭をかきながら、小五郎が紀子に紅茶をすすめた。

ところが、いつのまにか小五郎の両脇にぴたりとくっついているコナンと平次によってまたもや話は急に展開してしまうのだった。

「せやったら、ねーちゃん、さっそくそのホテルに案内したってくれや。」

「話は移動中に詳しく聞くよ!」

「え? あ・・・あの」

(オ・・・オマエら今度はただじゃおかねーからなッ!!!)

依頼人（後書き）

3話目ですが、思ったより話が進みませんでした・・・
これは長くなりそうな予感・・・
もっと一話ずつを長く投稿しなくてはッ！！
よろしければ感想くださいませ。。。

〔汗〕

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0181a/>

faked wedding

2011年1月20日03時40分発行